

看護学生の初年次教育におけるヒアリング指導の成果と課題

キーワード：初年次教育、看護学生、ヒアリング

○中村恵子、柄澤清美、中村圭子
新潟青陵大学看護福祉心理学部 看護学科

I 目的

看護学生対象の初年次教育に導入したヒアリング指導の分析から、ヒアリングにおける知識、スキル、態度について構造化を図り、指導の成果と課題を明らかにする。

II 方法

1. 対象：P大学看護学科1年生90人

2. 期間：2014年7月

3. データ収集・分析：

【ヒアリング指導】11～12人のゼミナール形式で、「ヒアリング」についてロールプレイングを用いて、90分程度の演習を行った。

【「話の聴き方」のチェックシート】チェックシート(28項目、4件法)を作成し、指導前後に学生よりデータを得た。指導前の結果について探索的因子分析を行い、因子を抽出した。質問項目を観測変数、因子を潜在変数として、共分散構造分析を行った。また、その結果を基に各因子の項目の平均値を計算して下位尺度得点を算出した。指導前と指導後の平均値の差について、対応のあるt検定を行った。

【学生の授業後感想】ヒアリング指導を終えた時点で、学生から〈難しかったこと〉、〈ためになったこと〉の記述を得た。それぞれについて類似内容をカテゴリー化した。

4. 倫理的配慮

チェックシートと授業後感想は、回答の自由と個人が特定されないよう統計処理することについて説明し、提出をもって承諾を得た。

III 結果

対象者全員から回答を得た。

1. 指導前の「話の聴き方」チェックシートのデータ分析

欠損値を除いて天井効果の見られた7項目を外した21項目で探索的因子分析を行った。因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果、十分な負荷量を示さなかった2項目を除き、再度、5因子で分析を行った。その結果を基に、19項目を観測変数、5つの因子を潜在変数として、共分散構造モデルを作成した。モデルの適合度が高くなるようにパスを取捨選択して探索した。観測変数12とした時、適合度指標は、GFI=.906、CFI=.980、RMSEA=.031となり、すべてに有意なパスが示された($\chi^2=55.238$ 、自由度=51、有意確率=.318)(図1参照)。

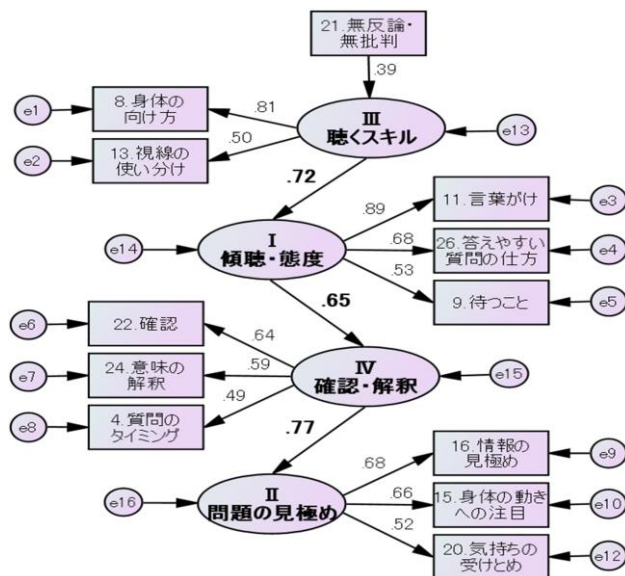


図1 「話の聴き方」の共分散構造分析 (N=87)

2. 指導前と指導後の下位尺度得点

図1の12の観測変数をもとに、指導前及び指導後の下位尺度得点を算出した。「無反論・無批判」、「傾聴・態度」、「聴くスキル」、「問題の見極め」、「確認・解釈」の順で変化が大きかった。すべてにおいて指導前と指導後では0.1%水準で有意な差が見られた。

IV 考察

「話の聴き方」についての共分散構造分析の結果や下位尺度得点の変化から、「無反論・無批判」、「傾聴・態度」、「聴くスキル」は、ヒアリングの構造において基盤となる要素であり、初年次教育において成長が期待できる部分であると言える。ロールプレイなどの体験を通して、重点において指導することが有効であると考えられる。また、「確認・解釈」、「問題の見極め」は、学びの広がりや深まりに伴って向上する部分であると考えられ、初年次教育においては、今後の学習・実践への動機付けを意図することが妥当であると考えられる。

本研究の結果から、ヒアリング指導の教育プログラムを改善することが今後の課題である。

V おわりに

現状把握されたヒアリングに関する課題を、この授業の気づきのみで改善することは困難であり、日常の指導や専門教育のなかで意識的に強化していく必要がある。